

サイコース (psychosis) の早期段階における臨床をめぐって

コーディネーター 松本 和紀

統合失調症をはじめとする精神病圏の精神障害に対する予防や早期発見・早期介入を推進していく必要性が、わが国においても徐々に認識されてきており、初回精神病エピソード (first episode of psychosis) を標的にした早期介入ストラテジーの発展が必要と考えられている。本シンポジウムでは、国際的な論調に合わせて psychosis という用語を用い、統合失調症をはじめとした精神病圏の精神障害の早期介入について、臨床的な視点を踏まえて議論することを目指した。

Psychosis の訳語は、“精神病”であるが、日本の臨床現場では“精神病”という用語が単独で用いられることは少ないであろう。しかし、この psychosis という用語が、早期介入という視点から診断的不確定さを許容する状態像診断として海外において復活している点を針間氏は指摘した。では、この psychosis とはどのような状態を指し、その発症リスク群である at risk mental state (ARMS) との違いはどこにあるのか？ 針間氏は、早期精神病の領域で用いられる最新の評価尺度を参照し概説を行った。針間氏の概説のとおり、psychosis の診断は症候学に依拠しているのが現状である。しかし、住吉氏が紹介したように、psychosis 早期段階においては、脳構造、神経生

理、認知機能など脳神経系の生物学的異常が報告されており、後々の予後予測や早期診断に役立つ生物学的指標の開発を進めていくことが今後期待される。

Psychosis 早期段階の薬物療法については、ARMS に対する薬物療法の可否や、その使用法について関心が集まっている。武田氏は、ARMS、初発統合失調症、統合失調症再発例の抗精神病薬治療についての臨床研究データを紹介し、統合失調症再発例と比べて ARMS や初発統合失調症においては、必要な抗精神病薬量、治療反応性、副作用の出現プロフィールなどにそれぞれ違いがあることを示した。

Psychosis という広い枠組では、生物学的要因のみならず心理学的要因が関与する割合も高く、最近の認知心理学的研究や疫学研究などから、これを支持する知見が報告されていることを井藤氏は紹介した。井藤氏は、早期介入を進めていく上で心理学的要因を検討することが大切であり、早期精神病における心理学的介入の可能性について論じた。松下氏は、実際の症例においてどのような精神療法的アプローチをとるべきかを、psychosis 早期段階の2症例を呈示し論考した。面接を通じた治療者とのかかわりの中で患者がどの

ように変化し、治療者がどのような視点や態度をもつべきかについて、臨床的な観点から示唆に富む細やかな描写が行われた。

心理学的介入とともに、psychosis 早期段階に適した社会的支援を発展させていくことは重要であり、早期から就労を目指した支援を行うことは、若い患者にとっては特に大切である。武士氏は、海外における最新の取り組みを紹介するとともに、東邦大学における psychosis 早期段階に特化したデイケアでの活動を紹介し、就労を目標とした支援を行うことで患者の就労率が高まることを示した。

最後に水野氏が指摘したとおり、early psychosis (早期精神病) は、暫定診断としての性質があり、その後の経過によって “psychosis” か

ら様々な診断カテゴリーに移行する可能性がある。早期介入の現場では、このような暫定的な枠組みが必要とされるが、予後良好な群も多く含まれる psychosis に対応する訳語が、“精神病” のままで果たしてよいのだろうか？という疑問がアンティスティグマの観点から水野氏より投げかけられた。精神疾患の早期発見・早期介入を推進するためには、疾患の早期段階、軽症段階を捉えるために適した概念や用語が必要なかもしれない。

共同司会の鈴木氏がまとめたように、本シンポジウムでは、psychosis 早期段階について多岐にわたる発表が行われ、現在のわが国と海外における最新の話題が提供された。この領域については、今後の国際的な動向を見極めながら、わが国での議論をさらに深めていく必要があるだろう。